

文京区

BUNKYO GENDER EQUALITY CENTER

男女平等センターだより

2011

No. 68

Topics

男女共同参画週間記念
2011 男女平等センター事業

～「青鞥」創刊100周年記念～

「元始、女性は太陽であった」

講師 米田 佐代子氏

Contents

- 「元始、女性は太陽であった」 2,3
- 男女平等センター トーク&シネマ 「ユキエ」と「レオニー」そして私 4
- **プラスワンセミナー** ・一人ひとりがいきいきと 文京区男女平等参画推進計画をよみ解く
・からだと ところで 感じる差別 5
- わくわくこどもフェスタ/
区政を知る懇談会 「みんなで学ぶ防災対策」 6
- 区からのお知らせ 「ワーク・ライフ・バランスに取り組む企業を募集」 7
- 男女平等センターまつりのご案内

2011年8月31日発行

発行/文京区女性団体連絡会 会長 大川米子
〒113-0033 文京区本郷4丁目8番3号
TEL.03-3814-6159 FAX.03-5689-4534

文京区男女平等センターは
文京区女性団体連絡会(文女連)が
指定管理者として管理・運営しています。



「元始、女性は太陽であった」

…新しい女たち男たちのメッセージは今…

NPO平塚らいてうの会長
らいてうの家館長 米田佐代子

はじめに—
『青鞥』ってなあに？

今年が青鞥創刊から100周年、文京区はその発祥の地です。でも『青鞥』というと、今でも「奔放な恋愛を繰り返した女性たち」「女子大出のお嬢さんたちの文学」「こっこ」らいてうは、結婚したら青鞥を投げ出してしまった」といったイメージが抜け切れない人もいるのではないのでしょうか。50年前、「青鞥」創刊50周年にあたって、75歳のらいてうが書いた文章があります。「青鞥のほんとうのことがわかるのはこれからだ」というのです。それからさらに50年経った今、わたしたちは『青鞥』のほんとうの姿をどれだけ理解しているのでしょうか。

『青鞥』創刊の辞として書かれた「元始、女性は大太陽であった」も有名ですが、さてその中身となると全文を読んだ人は多くありません。なにしろ発刊直前に創刊の辞がないことに気がついてあわてたらいてうが、一晩で書いたという長い文章です。禅やニイチエ、催眠術や心霊術の話まで飛び出してきて、発起人の間でさえ「いつこっこに意見らしいものが出なかつた」そうです。

そのため、今でも「難解」「観念的」など



といわれていますが、ここには、若き日のらいてうが現実にかつかった女性差別の力に、悩み苦しみながら「後ろを振り向かず」、「自分の主人は自分自身だ」と自覚して、「女性はみんな天才だ」「新しい女の手で新王国をつくらう」と訴えるに至ったプロセスが、率直に表現されているのです。そのメッセージは今読んでも少しも古くありません。それどころか、今わたしたちが問う「男女共同参画」のさきがけといえるテーマがずらりと並んで

います。そしてこれまであまり注目されてこなかった「新しい男たち」の応援の姿も見えてきます。
『青鞥』発祥の地で、その「再発見」に挑戦してみましょう。

Ⅱ 「青鞥」の女性たちが 問いかけたもの

『青鞥』に参加したのは東京の日本女子大出身者だけではありません。女子大自体が当時全国から自立を目指す女性たちの集う場でしたが、『青鞥』にも各地の女学校を卒業、教師などをしながら自分を表現しようとする女性たちが大勢参加していました。彼女たちは経済的にも精神的にも自立し、結婚後主婦として母としての生活に悩みながら、誌上にその思いを綴り広げた人びとも少なくありません。

たとえば、『青鞥』で女性の経済的自立について論陣を張った「三大論客」に、岩野清、上野葉、加藤みどりたちがあります。岩野清は1913(大正2)年の『青鞥』社第一回公開講演会で「思想の独立と経済上の独立」を論じ、上野葉は海軍士官と結婚しますが、夫の任地佐世保や呉などで女学校の教師をつとめながら「女に「男の厄介にならぬ」と言うだけの決心が欲しい

い」と書きます。加藤みどりは結婚後新聞記者になり、子育てしながら共働きをしますが、その苦勞を「余りにも殺風景」といながらも「働いて食って行く」と「一種の快感」を感じると書きました。
セクハラ告発の第一号は生田花世です。父の死後、弟を進学させてやりたいと徳島から上京して働くうちに雇い主からセクハラを受けた体験を公表、「女に財産がなく、仕事がない」ために「こうした理不尽が起こるのだ」と訴えました。

さらに、戦前どんなに望まない妊娠であっても中絶が認められなかった時代に、「墮胎」をテーマに小説を書いた安田(原田)皐月、同性愛を小説にした菅原初など、今日でいう「女性の自己決定」にかかわる作品が登場するのも『青鞥』の特徴です。
「わたしはわたし」という精神に拠り、「思うことをまっすぐに実行」したのらいてうですが、それはらいてうひとり個性ではありませんでした。夫とともに日本の植民地台湾にわたった龍野とも糸は、現地の女性たちとともに「空き缶拾い」をして資金をつくり、女性の学びの場として婦人会館を建設します(今も使われています)。十代の若さで『青鞥』に飛び込んだ伊藤野枝は最後の『青鞥』編集人になります。やがてそれを捨てて大杉栄

に入ります。やがてそれを捨てて大杉栄

と行動をとるに、関東大震災のとき大杉とともに殺されるまで歴史の荒波を走り抜きました。

Ⅲ 女たちがつくる 平和な世界

「青鞥」には「唯一の反戦小説」といわれる「戦禍」という作品があります。作者の斎賀(原田)琴は、戦時中も「大君の赤子一万屠られし記事見て泣かゆ秋風の窓に」という歌をつくりました。結婚して原田姓になり、戦後も長く生きて「チンドン屋のように反戦を掲げて歩きたい」と語っています。「青鞥」の女性たちが残した思いのひとつが「平和」でした。

らいてうは、年下の青年奥村博史と法律によらない結婚に踏み切り、二児の母となりますが、母となっていくのちのすばらしさに目覚め、「女性の産んだいのちが、女性の意見も聞かずに始めた戦争で殺される」ことに疑問を抱いて新婦人協会を立ち上げ、「平和のために女性に権利を」と訴えます。らいてうの「平和思想」の原点はここにありました。「国家の工」をやめてみんな世界民になろう」という文章もあります。

やがて戦後日本国憲法に出会い、「非武装・非交戦」の九条に共鳴して、原水爆反対、戦争反対の声を上げます。1971(昭和46)年5月24日に亡くなるまで、「この国も敵ではなく戦争だけが私たちの敵」意見が違っても平和のために手をつなごう」と呼びかけ続けました。湯川秀樹たちとともに「世界平和アピール七人委員会」に参加、世界中から核実験をやめさせようと国連や各国首脳に訴えを送る活動も続け、母親運動の提唱者になりました。

らいてうは、平和をつくる活動の中心に女性がいないではならないと希いました。「日本の女性はかつて無権利ゆえに戦争に反対できなかったが、戦後の今は主権者として戦争に反対するとき」と訴えたのです。

Ⅳ 「青鞥」を支えた 「新しい男」たち

「青鞥」の周辺には、「生みの親」といわれる生田長江や、妻の森しげと妹の小金井喜美子が「青鞥」に参加した森嶋外、「青鞥」終焉後新婦人協会発会式に出席し、「大逆事件」で死刑にされた菅野スガが獄中で持っていたスガの署名入りの本をらいてうに贈った堺利彦、らいてうの運動に協力した賀川豊彦など多くの男性陣がいます。長江や嶋外が文京区ゆかりの人であることも不思議なつながりです。らいてうの母校日本女子大学の創設者成瀬仁蔵も、第一次大戦後の1921年平和婦人協会を組織しますが、それは婦人国際平和自由連盟という平和団体を知ったからでした。その会長ジーン・アダムズにらいてうも影響を受けています。

このように直接間接にらいてうを支えた男性は少なくありません。戦後らいてうは森嶋外について、「青鞥」は先生に見守られていたことや、新婦人協会発足のときも、市川房枝が嶋外を訪ねたところすぐ賛助員になる事を承諾、趣意書や規約にも自分で細かく朱筆を入れてくれ、深い関心を寄せていた、と書いています。

しかし、なんといっても「新しい男」の代表的人物は、らいてうと半世紀も生活をともにした奥村博史でしょう。「若い燕」などことからかわれ、「売れない絵描き」「生

活力のない男」など見られがちだった奥村博史ですが、そういう見方のなかに「男は家族を養い、社会的地位を持つもの」というジェンダー意識が刷り込まれているのではないのでしょうか。実際にも彼は「青鞥」の表紙絵を描いて協力、指環づくりの名手としてすぐれた作品を残しています。戦時下の上海にわたったときは、すでに日中戦争前後だったにもかかわらず中国民衆の生活に惹かれ、1936年に魯迅が亡くなったときには弔問してデスマスクをスケッチ、油彩画にして魯迅夫人の許広平さんに贈るといふ交流もありました。

彼は、らいてうよりも早く1964年に亡くなりますが、その少し前に1篇の詩を遺しました。結婚半世紀を思いながら、「妻よ、おたがいになんとしても／せめてもう十年を一度よく生きようよ／その頃にはほんとうに／世界に平和がもたらされるだろうか」という一節があり、らいてうの平和への思いを共有していたことがわかります。おたがいにやりたいことだけをしてきた二人ですが、決して自分勝手ではなく、心の深いところまでつながっている。そういうパートナーとして生きただあかしのよう思われます。

むすびー らいてうさんの 声が聞える

らいてうの家を訪問して、遺品の着物が細身で小柄なの

に驚く人もいます。最近らいてうのインタビューテープが発見されましたが、小さいときから声が出ず「くもるような」声で、電話と講演が苦手だったらいてうをほうふつとさせます。自分を「はにかみや」と呼び、「七十ともなったら野の花、野の鳥と親しみたい」とあずまや高原に土地を求めながら平和運動に忙しく、一度も行くことがなかったらいてう。その彼女が苦手なことに挑戦し続けて、85歳まで「後ろを振り向かず生きた」人生を支えたのは、「わたしはわたし」「自分で自分の生き方を決める」姿勢でした。今のわたしたちにも問われる課題ではないでしょうか? 「あなた、自分していますか?」



「ユキエ」と「レオニー」 そして私

平成23年6月4日
講演: 松井久子 監督

6月4日に文京区男女平等センターにて松井久子監督の講演とともに映画「ユキエ」を鑑賞させていただきました。

原作「寂寥郊野(せきりょうこうや)」は吉目木晴彦著で第109回芥川賞受賞作。朝鮮戦争で来日したリチャードと結婚して幸恵がルイジアナ州バトンルーージュに暮らし始めて45年・その幸恵の言動崩壊が始まり症状は目に見えて進んでいく物語。夫は妻の認知症に心当たりがないでもない。国際結婚と老いの孤立を描く現代文学。

私は松井監督と同世代であり国際結婚した経験からとても興味深いものがあった。人間は誰でも突き詰めれば孤独である。しかし、さまざまな知恵と経験を生かし楽しく生活する工夫を学べると思う。それは、勿論、映画や文学また尊敬できる方からの話をより多く聞くことでそれぞれの立場に立った理解が広がる。

今年の3月11日の東日本大震災にはかつてないほどの被害が起きた。私たち日本人がいかにして将来、人間同士が助け合い自然と上手に共存していくかを考えなければならない良い機会だと思う。最近よく耳にする言葉に「頑張ろう」がある。映画の主人公、幸恵は十分に努力して頑張っていたと思う。ルイジアナの少ない日本人のコミュニティで、たまにしか会うことができない日本人達はそれぞれが力強く生きてきたと松井監督の講演から感じた。

昔は、今日のように携帯でどこにいても友人や家族に悩みを相談できず、何事も自分で判断しなければならなかった。すなわち、国際結婚はその国の文化の代表同士が同じ家庭で生活するのだから容易ではない。だが、お互いの国の伝統や習慣を学びながらお互いを教育し合うのだから、興味津々だ。基本的にはきちんとした経済の上に愛があって共通理解があれば良い環境のもと国際結婚して子孫が増え優秀な遺伝子が後孫に引き継がれ戦争のない平和な社会ができると考えたから私は国際結婚をした。現実には同じ民族同士でも難しいのだから多くの努力も必要となる。

私たちは、美しい日本を壊さないようにし、今ここに自分が存在していることに感謝して自分で何ができるかを考え行動し、各自が何をすれば社会に役立つかを念頭におきたい。幸恵が生きた時代でアルツハイマーになれば、夫のリチャードや家族も悩んだことだろう。そこから学ぶことは、なるべく多くの友人や社会と関わりを持ちコミュニケーション能力をキープすることだと思う。

私は写真を撮ることが趣味のひとつだ。「写真は記憶を持った鏡である」という言葉があるが、映画はまさに写真などの総合芸術なので思うように撮影がすすめば心地よいと思う。しかし映画作りには多大の予算も使われるので松井監督のご苦労も大変であったと察する。松井監督からは、素敵な笑顔とダイナミックな心の広さを感じた。講演の中で「スローグッバイ」のことばがとても印象に残っている。在宅介護のなかでゆっくりと息子達とのお別れを一つ一つ納得させながらのスローグッバイは素敵な言葉だと思う。なぜ「寂寥郊野」を選ばれたのか動機も知りたいし原作者の方にもお目にかかりたい心境にかられた。またシナリオに最高齢で今回携わったのが新藤兼人氏。深みのあるシナリオで映画の楽しみは倍加した。



昭和一桁生まれの方は戦争を体験しているから忍耐強い。幸恵の世代は、大和撫子の精神を受け継いでいる。その精神は目にはみえないがそれぞれの生き方の精神は子や孫に受け継がれると思う。アメリカ人と結婚した戦争花嫁の幸恵は、きっとアルツハイマーになっても家族の愛に包まれ心の奥は幸せだと思う。

最後に、私たちは、日本人としてアイデンティティを持ち世界のどこへ行っても力強く生きたい。常に誇りを持ち、正しい日本の歴史を学校教育で学び、子ども達に自信を持たせ、将来何をして生きていくか明確な目標を持てるように「生きる力」を備えてほしいと願うものである。(横浜市 新保照代)



一人ひとりがいきいきと暮らせる社会「文京区」をめざして

文京区男女平等参画推進計画を読み解く

日時：平成23年5月28日（土） 午前10時半

講師：文京学院大学大学院客員教授

文京区男女平等参画推進会議会長 堀内光子さん
文京区男女平等参画推進会議委員 佐藤 成臣さん

私は今回のセミナーを講師の堀内先生よりご案内いただきました。堀内先生の講演を聞けることはめったにありませんので、とても良い機会だと思いつけました。

私のなかで「男女平等」とは、抽象的でイメージが湧かなかつたのですがセミナーを聞いてとても興味深く、奥が深いことがわかりました。講演を聞く中で、やはり家庭、職場、地域団体、政治、全てにおいて、トップは男性が多く、男性の意見・感覚で物事が動いているのは現状です。しかし、例を挙げると、今回の震災でも取り上げられた女性特有の悩みや問題については、女性の視点を取り入れなければ解決策は出てこなかった。女性に指揮権があれば解決できた課題が沢山あったということ。女性と男性には、体力・精神力の差はあるけれど、能力の差は無いことをもって世間が認めるべきである。また、男性の意見が主体の世の中から、女性の意見や考え、感覚を取り入れることで、より良い解決策が見つかるだろうと思えました。ただ、今までは女性は主に家事をし、子供、舅、姑と接し、地域活動に参加し、時には外で働いてきた。この経験が柔軟な考え方をもち、細やかなところまで気づけるのだとも思います。これが職場重視になればそれはそれで問題が起きる気もしますが、今回のセミナーで重要だと思ったことは、男性・女性という固定概念を外して考える柔軟さと、お互いの気持ち尊重することが大切なのではないかと思えました。

（東京都 茂野陽子）

プラスワン+1セミナー

からだごとくころで感じる差別

性差別を疑似体験

しまししょう！

日時：平成23年7月9日午後1時半

講師：川村学園女子大学教授 内海崎 貴子さん

差別体験授業は、参加者が小学校の3年生の生徒を、講師が教師の役割をそれぞれ演じ、理由を明らかにせずに参加者を2つのグループ分け（リボンの有無による）、2つのグループに異なる価値判断を課します。2つのグループは同じ場所、同じ年齢であり、両者は平等という前提のもと、別々の扱いを受けます。その時の体験を後の意見交流の中で、差別とは何か・教育の現場は平等なのか・このように生徒を区分する教師に対して、生徒は何を感じるかを観点に考えてもらうワークシヨップです。

この授業の発想は、1968年にジョージ・エリオットが、アイオワ州にある小学校で行った人種差別を体験することによって、「差別のウイルス」から子どもたちを守るために行われた実験授業をベースにしています。

性別によって、生徒の扱いに差が生じる場面としては、学級委員を決める場面・将来なりたい職業を尋ねる場面など様々です。生徒に扮した参加者が自分の好きな色として「紫」と答えると、すかさず教師役の内海崎さんが、「ため、あなたはリボンがないんだから、ピンクとか可愛らしい色でしょ」とリボンの有無にふさわしい答えを押し付けるという具合です。

内海崎さんは、学校の中のジェンダー平等を考える際に、注意するべき点として、①これは差別ではなく、相手の特性を生かした区別（配慮）だと言われますが、本人の意図を無視した一方的な押し付けは「区別（配慮）」と呼べるのかという点をあげ、これは、「自分らしさ」「個性」と見分けることが難しいと述べました。

②社会では女性（男性）に生まれたら、何もせずとも女性（男性）になっていくものと思われがちです。ですが、学校生活に適切していく中で意図せず獲得されていく価値観や態度、社会の規範というジェンダーによるバイアスを再生産する装置としての役割もまた見逃してはならない点を述べました。



まとめで、内海崎さんは、ジェンダーの視点を持つということは個人が個人としての権利を尊重される社会のあり方や、一人ひとりは皆違い、その違いを大切にすることが大事とくり、セミナーは終了しました。

個人的には、これまでジェンダーのバイアスに対する配慮がされにくい（屈きにくい）領域であった法律・医療関係者の人たちに、この差別体験授業が広がり、認知が進めば、ジェンダーに対する価値観が変性される一担になるのではないかと思います。

千葉大学大学院 人文社会科学部 山田瑞紀
博士課程